

ディラン・トマス「異常なこほんちゃん」

(『若き日の芸術犬の肖像』から)

A Translation of “Extraordinary Little Cough”
from Dylan Thomas’s *Portrait of the Artist as a Young Dog*

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

2004年10月8日受理

とくに明るいきらめく八月の午後、まだぼくが自分のしあわせに気付く数年前だったが、ぼくたちがこほんちゃんとあだ名を付けていた、ジョージ・フーピング、そしてシドニー・エバンズ、ダン・デイビーズ、それからぼくの四人は半島(訳注：ウェールズGower半島。この西端に、このあと出てくる、ロッシリRhossilliの町がある。)の端まで行くトラックの荷台屋根に座っていた。背の高い、六輪トラックで、そこからぼくたちはすれ違う車の上につばを吐きかけたり、舗道のおんなたちにリングの芯を投げつけた。ひとつは自転車に乗った男の背中の中真ん中に当たった。その男は道をふらふらと横切った。一瞬ぼくたちはおしゃべりをやめ、ジョージ・フーピングの顔は真っ青になった。もしトラックがその男を轢いたら、男は死んで、ぼくは自分のズボンにそれからシドニーのズボンにもたふんゲロを吐きかけて、リングを持っていないジョージ・フーピング以外、ぼくたちは逮捕され、吊されるだろうと、自転車に乗ったその男が生け垣の方にふらふらと行くのを見ながら、ぼくは静かに思った。

でもトラックはすうっと通り過ぎていった。後方で、自転車は生け垣につっこんで、男は立ち上がり、拳を振った。ぼくはお返しに帽子を振った。

「帽子を振るべきではなかったよ。」シドニー・エバンズが言った。「どこの学校だかわかるだろう。」シドニーは賢くて、むっつりしていて、慎重だった。がま口と札入れを持っていた。

「今は学校、休みだぜ。」

「だれにも俺を追い出したりはさせねえ。」ダン・デイビーズが言った。給料を得るのに父親の果物店で働こうと、来学期学校をやめることになっていた。

ぼくたちはみな雑囊をしょっていた。ジョージ・フーピングだけは母親が、茶色の紙包み、ゆるんできていたが、を渡していた。スーツケースをみな持っていた。ぼくはスーツケースの上にコートを置いていた。書いてあるイニシャルが「N. T.」で、みんなには妹のだとわかってしまうからだ。トラックのなかには、テントが二張り、食料品の箱、やかんや鍋、ナイフやフォークの入った輸送箱、オイルランプ、プライマスの石油

コンロ、クッションシート、毛布、三枚のレコードに蓄音機、ジョージ・フーピングの母が渡してくれたテーブルクロスがあった。

ぼくたちはロッシリで二週間キャンプをすることになっていた。五マイルもずっと続く浜辺の上の野原だ。シドニーとダンも前の年そこに泊まったのだ。真っ黒になって戻ってきて、真夜中、キャンプファイヤのまわりでの踊りのこと、岩棚の上に裸になって肌を焼いている職業訓練校からやってきた歳のいった女たち、まわりで笑い転げている男の子たちのこと、夜明けまで続くベッドのなかの歌、そうした話しをゴッソリ威勢よく喋った。でもジョージは一晩以上家を離れたことがなかった。それからジョージはぼくに言った。学校が半日休みの日、雨が降っていて、何もすることがなく、村の洗濯場のベンチの上で、モルモットに、目が回るくらい競争をさせていたとき、家から三マイル離れた、聖トマスのおばさんのところに泊まっただけなのだと言った。おばさんは壁の向こうが見えるんだぞ。ホスキンさん、だったっけ、が台所で何やっているかわかるんだ。

「あとどれくらい。」ジョージ・フーピングが聞いた。ほどけた紙包みにしがみついて、みんなに見つからないようにソックスとサスペンダーを押し戻そうとしていた。それからまるでトラックの屋根が海に浮かんだエンジン付きの筏のように、ずっと続く緑の野原をすべっていくのをうらやましそうに見ていた。甘草(訳注：胃腸薬として用いられるマメ科植物)入りシャーベットだって、なんにでもジョージの胃は反応するのだった。でもぼくだけは、ジョージが赤糸で名前を縫いつけた、長いつなぎの下着を夏も着ていることを知っていた。

「何マイルも何マイルもだ。」ダンが言った。

「何千マイルもだよ。」ぼくが言った。「アメリカのロッシリだ。風に揺るぐ岩の先っちょに、キャンプしに行くんだ。」

「で、岩を木に結ばなくちゃいけないんだぜ。」

「こほんのやつはサスペンダーを使えるよな。」シドニーが言った。

トラックは轟音を立てて角を曲がった。「そらよっ

と。こほん、わかるかい。車輪ひとつで走ってんだぞ。」そして眼下に、野原と農場のむこうに、海が、ずっとむこうに煙を吐く蒸気船を浮かべて、きらめいていた。

「向こうの海が見えるか。きらめいているぞ、ダン。」ぼくは言った。

ジョージ・フーピングは屋根が滑ってゆらゆら揺れることや屋根の上からは海がぞっとするくらい小さく見えることを忘れていたふりをした。屋根の手すりをつかんで、ジョージは言った。「ぼくのとうさんは人食い鯨を見たんだよ。」声のなかにあった確信はしゃべりはじめるとすぐに消えた。ジョージはそのかん高いしゃがれ声を風に向かってあげた。ぼくたちに信じ込ませようとしているのだった。ジョージは自分のほら、ぼくたちの髪を逆立たせ、うなるトラックを止めるくらいでっかいものだということを、確かめたいのだとぼくは思った。

「お前の親父は薬草扱ってるんだろ。」でも水平線に浮かぶ煙は鯨が鼻から噴き出す白い噴水になった。その黒い鼻は突き進む船の舳先だった。

「どこで飼ってっんだ、村の洗濯場か。」

「お父さんはマダガスカルで見たんだよ。きばが長くて、ここから…、えーっと、ここから…」

「ここからマダガスカルだろ。」

険しい丘にたちまちびっくりしてジョージは黙った。もう父親の冒険話、その冒険話にはほこりまみれの、小さい男が、つばなし帽子をかぶり、アルパカのコートを着て、薬草がいっぱい置いてあって、壁にカーテンで隠した穴のいっぱいある店のなかに一日中立って、ぶつぶつなにかに言っていて、店では、肩こりをかかえた年寄りたちといざこざをかかえた若い娘たちが薄暗いところで診察の番を待っているのだ、そうした冒険話になんかにはもう頓着せずに、迫ってくる丘を見つめ、ジョージはダンとぼくにしがみついた。

「五十マイルは出てるぞ。」

「ブレーキがいかれたんだ、こほん。」

ジョージは身をよじってぼくたちから離れ、両手で手すりにしっかりつかまり、引き寄せ、震え、片方の脚で後ろにある箱をぐっと押した。そうしてトラックを安全な方に向け、石壁の角をまわり、緩やかになった丘を登り、つぶれた農家の門にまでつけたのだった。

門から最初の浜辺までずっと小径があった。ちょうど満ち潮だった。潮が打ち寄せるのが聞こえてきた。屋根に乗っていた四人の少年、ひとりはりっぱなスーツを着て、背が高く、色黒で、端正な顔立ち、ことばがはっきりした、かなりすれたやつ、ひとりはずんぐりしてぶかっこうで赤髪で、手首が短くすり切れた袖から死にものぐるいで飛び出して赤くなっていた、ひとりは重いめがねをかけ、ちょっと腹が出て、内を向いた肩といつもひものほどけたブーツを履いて別々の方向に行きたがっている足の子、もうひとりは小さく

瘦せていて、巻き毛で、いつ飛びはねるかわからない、すぐに泥まみれになる子、四人の少年たちは目の前に自分たちが泊まることになる野原を見ていた。二週間の新しい家にはとげのある生け垣が厚い壁になっていて、前庭代わりに海、トイレ代わりに草の生えた溝、そして真ん中に風にさらされた木があった。

ぼくはダンがトラックから荷物を下ろすのを手伝った。シドニーは運転手にチップをやった。ジョージは農家の門扉に手こずり、なかのアヒルを見ていた。トラックは去っていった。

「あの真ん中の木のそばにテントを張ろうよ。」

ジョージが言った。

「張るぞ。」シドニーがジョージのために門の掛けねをはずしながら言った。

ぼくたちは風を避けて、隅っこにテントを張った。

「石油コンロにだれか火をつけてくれ。」シドニーが言った。ジョージが手にやけどをしたあと、寝所に使うテントの外でまるく座り、自動車のことを話したり、田舎にやってきたことに満足し、みんなと一緒にでらしなくくつろぎ、おしゃべりしながらひとり思った。ぼくたちからそう遠くないところにある岩に波が打ち寄せ、また戻っていくこと、明日になったら、ぼくたちは泳ぎ、砂の上でボールを投げ、岩の上に立てたビンめがけて石を投げつけ、それから三人の女の子に出会うことを常に意識していた。歳が一番上の娘はシドニーだ。いかさないのはダンだ。一番若いのはぼくだ。ジョージは女の子たちに話しかけるときにめがねを割ってしまう。コウモリみたいに見えなくなって、向こうに歩いて行かなくてはいけない。そして翌朝こう言うんだ。「ごめんよ。みんなから離れなくちゃいけないんだ。でも伝言の用があったんだ。」

五時過ぎだった。お父さんとお母さんはお茶(訳注: high teaと呼ばれるもの。軽い夕食を兼ねる)をすませた頃だ。有名な城の絵が描いてある皿が食卓から片づけられる。お父さんは新聞を、お母さんはソックスを持ち、左手の丘の上、別荘で、蒼いもやのなかにいて、公園から公共のテニスコート越しに聞こえてくることもたちのかすかな声を聞き、ぼくがどこにいるか、ぼくが何をしているか思うんだ。野原でぼくは友達と一緒にいて、ひとりぼっちだった。草の葉を口にくわえ、こう言っていた。「デンプシー(訳注: ヘビー級ボクサーチャンピオン(1919-1926))は、あいつをぶん殴って、冷たくするぜ。」それからジョージの親父も見ることがない、海の上で大山のように、のたうち回り、海の底に消えていく大きな鯨のことを思った。

「野原の向こうまでぶっ飛ばすよ。」

ダンとぼくは牛のくそのなかを逃げ回り、ジョージはぼくたちのすぐ後ろにどんとどんと追いかけてきた。

「浜辺まで行こう。」

シドニーが先に立った。カーキの短パンをはいて、

兵士みたいにまよわず走った。踏み越し段を越え、野原をつぎつぎと駆け抜け、森になった谷に入り込み、ヒースを通り抜け、崖のそばの空き地にたどり着いた。そこには下卑た少年がふたりテントの外で、取っ組み合いをしていた。ひとりがもうひとりの脚に噛みついてるのが見えた。ふたりともうまくそして荒々しく顔を殴っていた。ひとりはいまい具合にもがいていた。もう一人はひととびして、相手の顔を地面に押さえつけていた。ブラゼルとスカリだった。

「よお、ブラゼル、スカリ。」ダンが言った。

スカリはブラゼルの腕を警官のようにつかんでいた。二度すばやくひねりを加えると、立ち上がり、ほえんだ。

「よお、みんな。よお、こほんちゃん。親父はどうだい。」

「大丈夫だよ。ありがとう。」

ブラゼルは草の上で、骨が折れていないかを探っていた。「やあ、みんな。お前らの親父はどうだい。」

ふたりは学校でも一番の悪で、身体が大きかった。学期の毎日授業が始まる前にぼくをつかまえて、くずかごにぼくをつっこんだ。それからかごを教卓の上に置くのだ。ときどき抜け出すこともできたが、できない時もあった。ブラゼルは痩せていて、スカリは肥えていた。

「バットンちの野原でキャンプしてるんだ。」シドニーが言った。

「おれたちはここで安静療法だ。」ブラゼルが言った。

「こほんちゃんは近頃どんななんだい。親父は薬をくれたか。」

ぼくたちは、ダンとシドニー、ジョージ、ぼくだ、浜辺まで駆け下りて行って四人だけになりたかった。田舎の海を歩き、叫び、波に向かって石を投げ、冒険のことを思い出し、また思い出になる冒険をしたかった。

「俺たちも浜辺まで一緒に行くぜ。」スカリが言った。

スカリはブラゼルと腕を組み合わせ、ぼくたちの後ろをぶらぶら、ジョージの不格好な歩き方を真似たり、小枝で草をなぎ倒しながら、ついてきた。

ダンが期待を持って言った。「ブラゼル、スカリ、君たちは長いことここでキャンプしてるのかい。」

「まる二週間だ、デイビーズ、トマス、エバンズ、それからフーピングよお。」

ミュースレイド浜に着いて、どっと腰を下ろした。砂をすくうと、指の間からつぎつぎとこぼれていった。ジョージは二重レンズを通して海を見ていた。シドニーとダンはジョージの脚に砂をかぶせてた。一方、ブラゼルとスカリはぼくたちの後ろにふたりの番人のように座っていた。

「おれたちはナイスに二週間行こうと思ってんだ。」アイスにかけてブラゼルが言い、スカリの肋骨を突い

た。「でも顔色には空気はここの方がいいなあ。」

「薬草くらいいいからな。」スカリが言った。

ふたりはしゃれにもならないジョークを笑い、平手で打ち、噛みつき、目に砂をまき散らし、また取っ組み合った。そうして笑い声を上げて、ひっくり返った。ブラゼルは携帯用の紙で鼻の血をふいた。ジョージは腰まで砂に埋まっていた。ぼくは海が引いていくのを見ていた。鳥がけんかしていた。太陽が我慢強く落ちてかいていた。

「こほんちゃんを見ろよ。」ブラゼルが言った。「異常じゃないか。砂から生えだしてるぜ。こほんちゃんには脚がありません。」

「こほんちゃん、かわいそうなこと。」スカリが言った。「世界で一番異常なこどもなのです。」

「異常なこほんちゃん。」ふたりは一緒に言った。「異常、異常、異常。」ふたりは歌った。それからふたりとも小枝で指揮を執った。

「泳げません。」

「走れません。」

「勉強、できません。」

「球を投げられません。」

「打つこともできません。」

「それからね、きつとしっこもできないんだよ。」

ジョージは両の脚で砂を蹴った。「できるよ。」

「泳げるかい。」

「走れるかい。」

「球を放れるかい。」

「そつとしとけよ。」ダンが言った。

ふたりは脚を引きずりながら、近づいてきた。海はずっと引いていっていた。ブラゼルが、指を振りながら、まじめな声で言った。「おい、ほんとうのところ、こほんちゃん、きみは異常じゃないのかい。とっても異常じゃないのかい。はいか、いいえとええ。」

「絶対、はいか、いいえだぞ。」スカリが言った。

「いいえ。」ジョージが言った。「ぼくは泳げるし、走れるし、クリケットもできる。だれも怖くないよ。」

ぼくは言った。「前の学期は学年で二番打者だったんだ。」

「じゃ、そいつは異常じゃないか。もし二番打者がつとまるなら、一番でも言い訳だ。でも違うな。それはふつうすぎる。こほんちゃんは二番打者でないといけないんだ。」

「質問には答えたな。」スカリが言った。「こほんちゃんは異常です。」ふたりはまた歌い始めた。

「走るのもうまいぞ。」ダンが言った。

「よし、証明させろよ。スカリとおれは今朝、ロッシリの浜を全部走ってきたんだ。なあ、スカル。」

「一寸ち残さずな。」

「こほんのやつにできるか。」

「できるよ。」ジョージが言った。

「じゃあ、やれ。」

「やりたくないよ。」

「異常なこほんちゃんは走れません。」ふたりは歌った。「走れない。走れない。」

三人の女の子が、みんな金髪だった、白の短パンをはいて、腕を取りあい、崖の斜面を降りてきた。腕も脚も草の実みたいに真っ黒だった。笑ったときに歯がとて白かった。女の子が浜辺に降り立つと、ブラゼルとスカリは歌うのをやめた。シドニーは髪を後ろになでつけ、なにげなく立ち上がり、両手をポケットに入れ、女の子たちの方へ歩いていった。三人はかたまって立っていた。金色で、真っ黒で、夕陽をちらっと見てはめ、スカーフをはたき、お互いに笑みを交わしていた。シドニーは三人の前に立ち、にたと笑い、会釈した。「やあ、ギネス。ぼくのこと、憶えてるかい。」

「気取り屋め。」ダンがぼくの脇でささやいた。それからジョージに会釈を真似て見せた。ジョージは引いていく海をまだ見ていた。

「ええ、わたしたちを驚かそうというのでなかったらね。」一番背の高い女の子が言った。前もって練習したちょっとした手の動きで、まるで花を配るように、ペギーとジーンを紹介した。

ふとちょペギー、ぼくには陽気すぎるな、ホッケー用の脚、おてんば族だ。ダン向きだな、と思った。シドニーのギネスは十六で、とびきりだった。清楚で、近寄りがたかった。ベン・エヴァンスの店にいる女の子とは比べものにならなかった。でもジーンは恥ずかしがり屋で、バター色の髪の毛で、巻き毛だった。これはぼくのものだ。ダンとぼくはゆっくり女の子たちの方に歩いた。

ぼくはせりふをふたつ準備した。「きれいなものはきれいだ(訳注: Macbethのせりふのもじり)、なあシドニー。よそで浮気はいけないよな。」「ごめんよ。きみたちが来たときに満ち潮を用意しておけなくて。」

ジーンはかかとを砂にめり込ませ、ほほえんだ。ぼくは帽子をあげた。

「やあ。」

帽子が彼女の足下に落ちた。

かがんだとき、砂糖が三個、ぼくのブレザーのポケットから落ちた。「馬にえさをやってたんだ。」ぼくは言った。三人が声を上げて笑ったとき、いけないことをしたようにぼくは赤くなり始めた。

帽子で砂を掃くこともできたし、自分の手にキスすることもできた。三人にセニョリータと呼びかけ、際限なくほほえませることもできた。あるいは距離を置いたまま立っていることもできた。こちらのほうがずっとよかったろう。そして髪を風に吹かれるままにしておくこともできた。その晩は風は吹いていなかったのだが。そしてぼく自身を謎に包みこんだまま、太陽を見つめている。女の子たちに話しかけるには、硬

派すぎるのだ。でもぼくはずっと自分の耳が真っ赤になっていることが、ぼくの胃は貝殻みたいに空っぽで、いろんな声でいっぱいだということがわかっていた。

「女の子が行ってしまう前になにか、早く話しかけろ。」その劇的な静寂の向こうからひとつの声はぼくの耳にとどいていたのだろう。ぼくはバレンチノ(訳注: 映画俳優(1895-1926)。代表作、*Blood and Sand* (1922) など)のように明るくて目に見えない砂の闘牛場の端に立っているのだった。「ここはすばらしいんじゃないかい。」ぼくは言った。

ぼくはジーンだけに話しかけた。そして、ジーンが首を振り、巻き毛を揺らし、「ポートコール(訳注: Porthcawl南ウエールズの海辺の町)よりすてきだわ。」と言ったとき、これが恋なんだ、と思った。

ブラゼルとスカリは悪夢に出てくるふたりの暴漢だった。ジーンとぼくとで崖を上っていくときふたりのことは忘れていた。そしてふたりがまたジョージをいじめているのか、取っ組み合いをしているのか見ようと振り返ったとき、岩の陰の所からジョージがいなくなっていて、ふたりが崖の下で、シドニーそれからふたりの女の子と喋っているのが見えた。

「名前はなんて言うの。」

ぼくは自分の名前を言った。

「ウエールズの名前ね。」ジーンは言った。

「きみのはきれいな名前だね。」

「まあ、ふつうの名前よ。」

「また会えるかい。」

「あなたがお望みなら。」

「もちろんだよ。朝、泳ぎに行こうよ。鷺の卵を取ってみてもいいよ。ここに鷺がいることは知ってるかい。」

「いいえ」ジーンは言った。「浜辺にいるかっこいい男の子はだれ。汚いズボンをはいた背の高いひと。」

「かっこよくはないよ。あれはブラゼルだ。髪とか洗いもしないし、ときもしないんだ。暴れん坊で、いかさま師だよ。」

「かっこいいと思うわ。」

バットン家の野原に入っていった。ぼくはジーンにテントの中を見せ、ジョージのリングをやった。「たばこが欲しいわ。」ジーンは言った。

ほかのものが帰ってきたとき、ほとんど暗くなっていた。ブラゼルとスカリはギネスと一緒にだった。片方ずつ腕を取っていた。シドニーはペギーと一緒にだった。ダンは口笛を吹いて、ポケットに両手を入れ、後ろを歩いていた。

「お、カップルじゃないか。」ブラゼルが言った。「ずっとふたりきりでいて、手も握っていないときてる。ピルがいるだろ。」ブラゼルがぼくに言った。

「イギリスの子供を作れよ。」スカリが言った。

「よしてよ。」ギネスが言って、スカリを押し離れた。

でも声を上げて笑っていた。それからスカリが腰に腕を回したとき何も言わなかった。

「火でも焚こうか。」ブラゼルが言った。

ジーンは女優みたいに手を叩いた。ぼくは自分がジーンのことを好きなのはわかってはいたけど、ジーンが言ったり、したりすることは好きではなかった。

「だれが火をつけるんだい。」

「この人が適役よ、きっと。」ジーンはぼくを指さして言った。

ダンとぼくは木ぎれを集めた。そしてすっかり暗くなった頃には、火のはじける音がし始めた。寝所用のテントの中にはブラゼルとジーンがびったりくっついて座っていた。金色の髪の毛はブラゼルの肩に乗っていた。スカリはふたりの近くで、ギネスにさきやいていた。シドニーはつまらなさそうにペギーの手を取っていた。

「こんな水溜まりの多いところ見たことあるかい。」ぼくはジーンが火に照らされた暗闇のなかでほほえんでいるのをじっと見ながら、言った。

「キスして、チャーリー。」ダンが言った。

ぼくたちは原っぱの隅におこしたたき火のそばに座っていた。向こうの海はまだ音を立てていた。夜の鳥が二、三羽鳴くのが聞こえた。「ほー、ほー。耳をすましてみろ。ぼくはフクロウは嫌いだ。」ダンが言った。「あいつら、眼をほじくり出すんだぜ。」そうして、テントのなかの甘いささやき声を聞かないようにした。ギネスの笑い声が、突然月明かりが照らし出した原っぱにただよった。でもジーンは、あの獣に肩を抱かれて、黙ってほほえんでるんだ。ジーンのかわいい手はブラゼルの手の中にあるのだ。

「女というのは。」ぼくは言った。

ダンは火のなかにつばを吐いた。

ぼくたちは夜の真ん中にいてふたりぼっちで、欲望

を超越して急に歳を取った感じだった。そのときジョージが幽霊みたいに、たき火の明かりのなかに現れた。そして震えながらそのまま立っていた。ぼくは言った。「どこに行ってたんだ。何時間にもなるぞ。どうしてそんなに震えているんだ。」

ブラゼルとスカリが顔をつき出した。

「よお、こほんちゃんよ。親父はどうだ。今夜は何をなさっておいでだったのかな。」

ジョージ・フーピングはもう立っておれなかった。ぼくは腕をジョージの肩に回して、支えた。でもジョージはそれをふりほどいた。

「ぼくはロッシリの砂浜を走ってたんだ。とことん走ったぞ。お前はぼくができないと言ったろ。ぼくはやったぞ。ずうっと、ずうっと走ってたんだ。」

テントの中にいた誰かが、レコードを蓄音機にかけた。『だめ、だめ、ナネット』（訳注：1925年初演のミュージカル。曲は“I Want To Be Happy”など。）のベスト曲だった。

「暗いなかを、ずっと走ってたのか、こほんちゃんよ。」

「お前より絶対速く走ったぞ。」ジョージは言った。

「きっとそうだな。」ブラゼルが言った。

「お前、俺たちが五マイル走ると思うのか。」

曲は「ふたりでお茶を」になった。

「こんなに異常なことを聞いたことあるか。おれは、こほんのやつが異常だと言ったぞ。こほんちゃんは一晩中走っていたんだ。」

「異常だ、異常だ、異常なこほんちゃん。」ふたりは言った。

寝所のテントから暗闇に向かって笑い出すさまは、首がふたつある少年のようだった。振り返ってもう一度ジョージを見てみると、深い草のなかに仰向けになって、寝そべっていた。髪が炎に触れていた。